

第2回「変わった点と「よりどころ」という考え方」

ナレーション：

令和7年の内閣告示改定によって示された、ローマ字のつづり方の「本表」。

ここには、私たちが暮らしの中で目にしてきたつづり方が並んでいます。

今回は、この「本表」のつづり方の性格を見ていきます。

女性：

これが今回の改定で示された「本表」です。

改定の趣旨であった「できるだけ統一的な考え方を示す」

という方針の下、社会での使用実態を踏まえて整理されました。

「shi」「chi」「tsu」「fu」「ji」など、現在広く使われているつづり方が、
国語を書き表す際のよりどころとして示されています。

男性：

確かに、私たちが暮らしている中で実際に目にするつづり方になっていますね。

しかし、これが発表されたということは、

今後はこのつづり方以外は認められないということになるのでしょうか。

女性：

いいえ。

今回の改定ではこのつづり方を一般の社会生活において

現代の国語を書き表す際の「よりどころ」と位置付けています。

ここでいう「よりどころ」とは、強制したり、ほかの表記を制限したりするものではありません。

男性：

科学や技術、芸術などの専門分野、あるいは、個人の手紙や日記といった私的な書き物にまで、
この考え方を及ぼすものではない、と示されています。

また、過去に書かれた著作や文書の表記を否定したり、書き換えを求めたりするものではありません。

男性：

これまで使われてきた表記を否定するものではなく、個人の書き方を制限するものでもない、

つまり、制限的・強制的ではない、ゆとりのある規範としてのよりどころ、ということですね。

女性：

そのとおりです。

外来語特有の音や、各地域の言葉に用いられる音についても触れられています。

これらは、多様性が高く、一律に整理することが難しいため、

今回の統一的な扱いの対象からは外されています。

男性：

外来語は、「Takanawa Gateway」のように
元の言葉のつづりがそのまま用いられることも多いですね。
共通のよりどころとして「本表」という土台を整えつつ、
専門性や地域性、そして個人の意思を尊重する。
この「よりどころ」という考え方が、多様な言語生活を支えていると言えますね。
まずは本表を共通のよりどころとして広く共有し、将来に向けてつづり方を安定させていく。
それが、今回の改定の趣旨と言えそうです。

女性：

なお、「si」「ti」といった、いわゆる訓令式や、
「ぢ」や「づ」といった四つ仮名に関わるものなど、歴史的な背景を持つ表記については、
この動画シリーズの「これまでのつづり方との比較」の回で詳しく解説します。
これまでの考え方がどのように整理されたのかを、そこで確認していきましょう。

男性：

過去と未来をつなぐ工夫も用意されている、というわけですね。

女性：

今回は、実際に書く上での具体的なつづり方のポイントを見ていきます。